まつばらん (Holcoglossum quasipinifolium Schlt.)

ツデアル、花ハ白色デ桃色ヲ帶ビ、距ハ大キク且長イ、併シ全體ノ形ハかうとうらん (Saccolabium) ニ似テ居ルガ其花序纖細デ上方ニ向キ一又ハ二三花ヲ着ケルノミデアル（此處ニ掲ゲタ寫眞ハ臺北植物園ノ吉田氏ノ寫ス所、茲ニ氏ノ好意ヲ謝ス）

○植物妖怪漫話（其三）

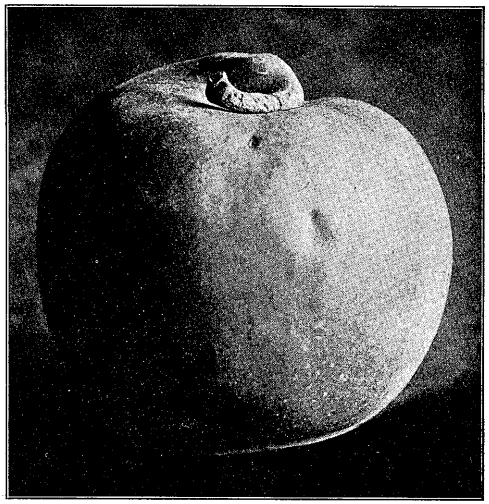
久内清孝

珍形ヲ呈スル苹果

世間ノ一般人士ヲ捕ヘテ苹果ハ果實デナイナドヽ言ッタラオ前ヘハ氣ガ違ッテ居ルト叱ラレル位ナラマダヨイガ場合ニヨッテハ毆ラレルカモ知レナイ事程左樣ニ苹果ハ世人カラ果實視サレテ居ルノニ學者ハコレヲ僞果ダトカ擬果ダナドヽ云ッテ居ルコトハ中學生モ既ニ之ヲ知ルト云ヘマス、實ニ學者ハ非

常識ナモノデアリマス、然ルニ之ヲ裏書スル樣ナ事實ガ、證據ガ戸倉章氏ノ好意ニヨリ余ノ眼前ニ提供サレタコトハ常識アル君子ニハ甚ダオ氣ノ毒ナ次第デアリマス

今日苹果ノ擬果ナルコトヲ認識スルニハ之レヲ切ッテ見ルヨリ外ナイノデアルガ戸倉君ノ提供ニカヽルモノヲ眼前ニ置イテ沈思默考スルト外見的ニ擬果ノ感ヲ起サセズニハ居ラレマセン、マー寫眞ヲヨク見テ下サイ、尤モ寫眞デスカラ遠近ノ差ハ少ナイガとぐろヲ巻イタ樣ナモノハ私ハ萼筒ノ殘存部ト見ルノデアリマス、然シテ之ヲ追究スルトコレガコノ苹果ノ全部分ノ基部ニナリマス、卽チ此りんごイヤ西洋りんご卽チ苹果ハコノ巻捩セル狹細部ノ尖頭部ガ擴大膨脹シテ出來タモノデアルカラ萼筒ガ成長シテ之ガ出來タコトガ判ラズニハ居リマセン、其故正常形ノりんごモ花後ニ殘存セル萼筒ノ發育ニヨリ本來果實トナルベキ子房ガ之レニ包圍セラレタルモノデアッテ一般正常形ノモノハコノ萼筒ガコンナニ狹細ニナラズニ發育シタモノデアッテ此ノ珍形果ノ場合ニハ其レト反對ニ萼筒ノ基部ガ子房及ビ子房ヲ包圍セル萼筒ノ尖端ト行動ヲ俱ニシナカッタノデアルト考ヘタイノデアリマス、從ッテコノ事實ハ苹果ガ擬果デアッテ食用部分ハ花床ガ子房ヲ包圍シテ居ル事實ヲ物語ッテ居ルモノト言ヘルノデアリマス、若シ反對ノオ說ガアレバ私ハ決シテ十三對一ヲ固持スルモノデハナイガ自個ノ考ヘヲ一應申述ベテオキマス

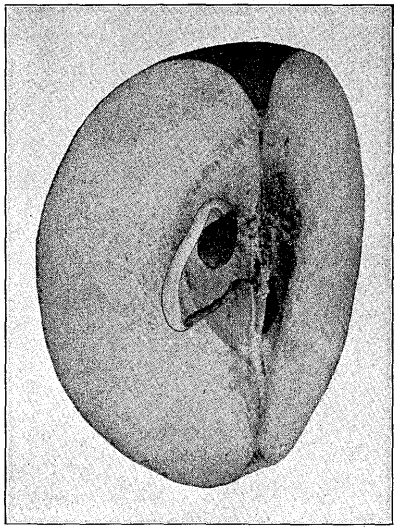


果形畸ノ果苹

尙コノ珍果ハ戸倉氏ガ東京ノ店デ求メラレタモノデ其産地ハ之ヲ知ル由モアリマセンケレ共莘果ハ輸入禁止果實デアリマスカラ何レ邦産ノモノデショウ、終リニ戸倉氏ノ好意ヲ謝シマス

果實中ニ於ケル種子ノ發芽

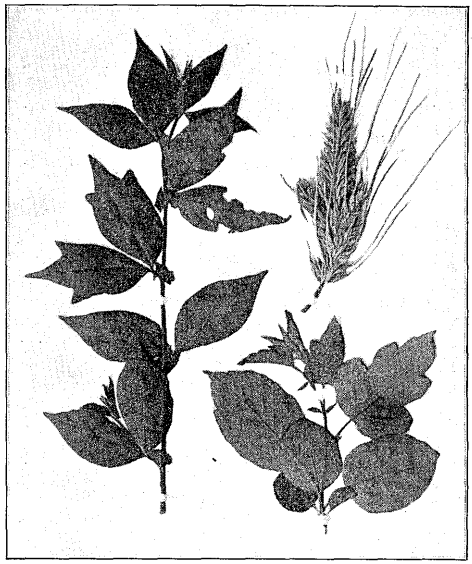
最近小石川ノ植物形態學教室ノ熊澤三夫學士ノ好意ニヨリ梨デ其內ニ胚ニ種子ガ發芽シタモノ、寫眞ヲ頂イタ、卽チ此處ニ揭出シタモノガ夫レデアル、梨ハ熊澤學士ニヨレバ「早生赤」ト云フ品種デ尙氏ハ之ヲ越後新潟産ノモノト推定シテ居ラレル、ナンデモ東京ノ本郷デ五月ニ買入レタモノ、由、之ヲ一口ニ言ヘバ哺乳類ノ場合トハ違フニシテモ胎生スルト云フコトガ出來ル、コノ事實ハはやとうりやまんぐろーぶノ類デヨク例ニ出ル場合デアルガ梨ナドデハ恐ラク珍事實デアラウ、其原因ニ就テハ之ヲ臆測スルニ既ニ長期貯藏サレテ果實イヤ擬果ガ正ニ腐敗ズル時期ニ達シタ爲自己ノ保存上コノ果中ニ包含サレテ居タ種子ガ發芽ヲ促進サレタカ又ハコノ種子ノ發芽ヲ抑制スル機能ヲ發揮スル力ガ無クナッタモノト見ルノガ妥當デアラウト思ハレル、尤モコレガ此品種ノ具有スル特異性カモ知レナイガソレハ今直チニ主張スルコトモ反對スルコトモ出來サイ、尙熊澤氏ニヨレバ同氏買入ノモノハ總テ同樣ノ現象ヲ呈シテ居タ由デアルガソレ丈デ推定ハ下サレナイカラ今ハ事實ヲ報告スルニ止メテオクガ兎ニ角常規ヲ逸シテ居ルコトハ議論ノ餘地ガナイカラ妖怪漫話ノ材料トシテオクコトニシタ



大 約 1/3　梨タシ芽發ニ中實果
（眞寫氏夫三澤熊）

中村正雄氏寄贈ノ怪植物

栃木縣宇都宮高等農林學校ノ中村正雄氏カラ小包ガ屆イタカラ開緘シタラ此寫眞ノ樣ナ三植物ガ現レタ、中村氏ハ余ヲ語ルニ足ル畸形蒐集家ト見テ惠マレタノカモ知レナイガ余ハ一個無名ノ人間デ人カラ研究資料ノ贈與ヲ享ケル如キ一人前ノ人物デナイコトハ余ノ周圍既ニ之ヲ知ルト斷言スル、シカシコノ同氏ノ好意ヲ無ニスルノ無禮ナルヲ思ヒコレヲ江湖同好ニ示スコトニシタ



畸形ノ麥大麥ト小麥トずみたしたわたに

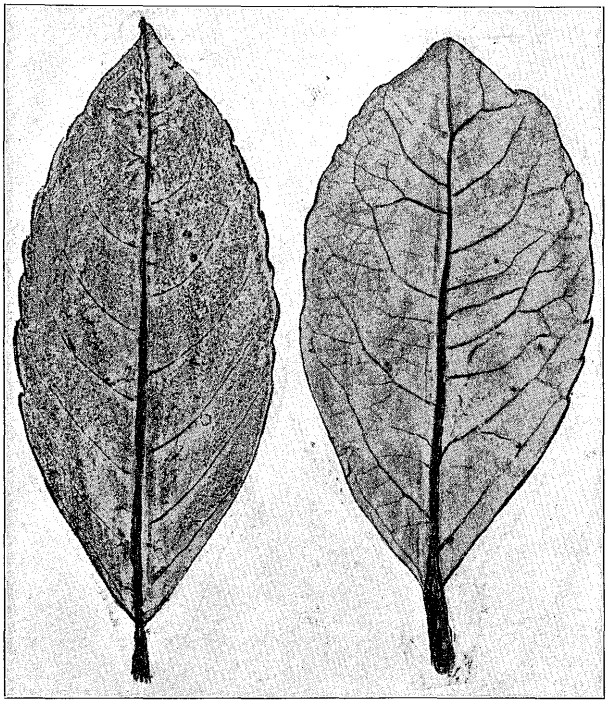
右上ハ大麥ノ祥瑞現象ニシテ之ニ就テハ白井先生ガ植物妖異考ニ博引旁證シテ詳說シテ居ラレルカラ再ビ贅セズ（昭和六年六月十四日宇都宮郊外デ中村氏採）

右下ハずみノ異型葉デ最モ普通ナ現象、コレニ似タ事ガさくらノ不定芽ニ出來ルコトガアリ余ハソレヲ往年常陸國筑波山ニ於テ採集シタコトガアル（右ずみハ同年五月二十四日下野古賀志山頂ニテ中村氏採）

左ハたにわたしノ葉ニ粗鋸齒ト言ハンカ又ハ缺刻出現ト言ハンカ要スルニ邊緣ニ異常ヲ呈セルモノニテ宜シク京都ノ柊神社ニ移植奉納スベキモノナルベシ（同年五月二十四日下野古賀志山ニテ中村氏採）

さんごじゅぼくノ葉ノ邊緣

邦產がまずみ屬ノ內デ葉緣ノ鋸齒ノアマリ著シクナイノハ恐ラクごもじゅトさんごじゅぼくデアラウ、其內デ



鋸歯ルタレハ現ニ縁葉ノゅじごんさ

モさんごじゅぼくノハ餘リ著シクナク全縁マタハ波狀緣デアル其內デ某個體ニハ上揭ノ如キヤヽ明瞭ナ鋸齒緣的ノモノモアルガ枝條ノ先端ノモノニハ殊ニヨク現レル、若シコンナノガ更ニ極端ニ發現スルニ至レバ曾テ牧野先生ガ東京上野公園ノ帝室博物館ノ生垣デ一本見出サレタト云フあぢさいばのさんごじゅノ樣ナモノニマデ移リ變ルノデアラウ

コノさんごじゅノ葉芽ガ開綻スルトキ其裏面ヲ見ルト其處ニハ褐色デ星芒狀ノ鱗毛ヲ認メルコトガ出來ルガ大概ハ有毛ノ葉ヲ有スルがまずみ屬ノ他ノ種類ニ伍シテつるつるノ葉ヲ有スルさんごじゅモ若イトキニハヤハリ多少ノ毛ヲ有スルト云フコトハ如何ニモ面白イコトデアル

今日植物妖異現象ヲ探究スルコトハ相當ニ骨ノ折レル仕事デアリナガラ結果ハ余リ面白クナイタメ勢コンナモノマデ探シ出シテナントカ物言ヒヲツケナケレバナラナイコトニナッタ、讀者ニハ御迷惑デアラウシ雜誌ノ賣レ行キニモ多少ハ影響スルデアラウガ書ク吾輩ダッテ多少苦シイノデアルカラ自地共ニ迷惑ナ植物妖異現象ノ記事ハ之ニテ當分又ハ永久擱

筆致スコトニシタ(昭和七年五月)

○びらうどあふひ

びらうどあふひ (Althea officinalis L.)
(昭和六年津村藥草園ニテ木村撮影)

津村研究所　木村雄四郎

びらうどあふひトハ牧野先生ガ藥用ノアルテア即チ Althea officinalis L. ニ下サレタ新和名デアル、蓋シ其葉ノ觸感ハ誰モガ直チニびろうどヲ連想スルガ故デアラウ、コノ命名ハ昭和五年十月津村藥用植物園ニ於テ爲サレタガ未ダ廣ク發表サレテ居ナイノデ茲ニ之ヲ御紹介スル、コノアルテアニハ從來うすべにたちあふひナル和名モアルガ、コレハ同屬たちあふひ(A. rosea Cav.)ノ淡紅色品(此種ニハ種々ノ花色ガアル)ト間違ヒ易イノデ其名稱ノ優劣ハ今茲ニ論ズル迄モナイコトト思フ

びろうどあふひハ元來西洋ノ藥草デ葉及根ハ廣ク粘滑藥トシテ藥用ニ供サレ我國ニ於テモ藥局方ノ制定以來醫藥品トシテ局方ニ收載セラレ今日ニ及ンデ居ルガ今回改正ノ第五版藥局方デハ之ヲ削除シ專ラ國產ノとろゝあ